

ウマ娘 ストリートダービー

ろどっぱち

本作はあくまで個人製作の二次創作であることをご理解ください。

また今作は違法改造、違法レース等を助長するものでないこともご理解ください。
ウマ娘 それは走るために生まれてきた存在といえる。でも、誰しもが頂点を、
輝きを得られるわけではない。その現実を知り、ナイスネイチャはレースの世界
を諦め。普通の世界を生きてきた。しかし、一台のロードスターと巡り合ったこと
で、再び「走り」の世界へと導かれていく。

目次

P1	ストリートの世界で	1
P2	交流戦！	25
P3	余韻に浸る間もなく	49
P4	長期戦	69
P5	狂乱、故に	77
P6	過ぎる時間とやってくる時間	97
すこし小話		115

P1 ストリートの世界で

注意

本作品はフィクションです。実際の公道での暴走行為、違法改造等を助長するものでないことを深くご理解ください

ずっと前。それは、レースを、夢を本当に諦めたとき。

走ることは嫌いじゃなかったし、むしろ好きだったかも。けど、ほんとにキラキラしたものに届かないって、わかったから。それが早かったことが、私の幸運なのかもしれない。

きっと違う世界の私は、レースで活躍したり、しなかったりしたと思う。トウカ

イテイオー。三冠を全部とって現役バリバリだとかいう。彼女ではないが、そういった、ホンモノが確かに私の目には映っていた。

眠っているとき。夢で、たまに語り掛けられる。本当はトレセンで、そういうウマ娘と競う運命だったんじゃないかって、何か今の自分に不満がないかって。

ないわけではない。満たされなんかしない。でも、ああやって走っているうちは、満足してるような気がして、だから今も、どこまでも認められないこのストリーートの世界で、満たされようと 走り続ける――

ちょっと久しぶりにここに来る。埼玉県秩父市と群馬県多野郡神流町を結ぶ、土坂峠。もともとから住み着いたチームがいないから、私たちが実質最速っていう、ちょっとぴりかわいそうなところ。

ここ2週間くらいこれなかったのは、チューニング代が案外馬鹿になんなくてタイヤ買うとせっかく貯めてきた貯金に手を付けかねないっていう本末転倒なことが起きてたから、なんてアホなこと。今日は三人ともくるって話だから、吹かす煙草もなくトンネル前で待っててみる。

NAロードスターを買ったのは2年前。初めてあこがれたハチロクと同じテンプ

クだからって、中古で100万いかないくらいのをローン組んでもらって買った。いままでキラキラとは程遠いアタシの人生の中に光を灯したのは、間違いなくこのロードスターだろう。

： すこし早かったなあ。カレシがいるでもないんだから、なんておもっている、チーム一のツッコミバカのエンジン音がしてくる。最初んころはエンジン音なんてうるさいか静かかくらいしかわかんなかったのに、人間変わるんだなあ（人間じゃないけど）

予定より早く約3分前、EP82スターレットが顔を、というか派手に姿を見せる。（FFでそんな動きするかフツー？）

「おいつす。早いね、ターボ」

「ひっさしぶり！そういうネイチャこそ早いね！」

ツインターボ EP82を駆る彼女はチーム一の元氣娘でツッコミバカ。（名前に反してシングルターボのマシンである。）

「久しぶりだったって、先週だって顔合わせたのに、ずいぶんさみしがりやなんだね？」「けど、今までは毎日みたいにあってたんだから、久しぶりに思ってもしかた

ないと思うけどな」「あゝ、それもそっか、最近妙に時間の流れもはやいから」
「そんなおばさんみたいなこと言って、ほんとにおばさんになっちゃうよ？」「ハイハイ、もう片足つつこんでるけどね」

同い年にそんな心配しよっちゅうされることに軽い疑問を抱きながら話していると、残りの面々もやってくる。

「あれ？二人とも早いなあ。」「概ねちようどになるように出発したつもりだったんですが……」「ああいや、あたしたちがたまたま早かっただけだから。気にしないでいいよ」

チームメンバーは4人、あたし（ネイチヤ）とターボ、それからS13（Jis）に乗ってるマチカネタンホイザ。うちのチーム、カノープスのイチバンの癒し枠で、弟子のような存在でもある

それとGC8のインプレッサに乗るイクノディクタス。うちのチームトップの頭脳キャラで、前線張るといふより、バックアップメイン。けどはつきり言ってケツコー速い。（あたしの代わりに走ってくれないかな）

三人にあったのは、ロードスターを買ったころの話。元々知り合いだったらしい

けど、土坂の埼玉方面を根城にチームをやるってんだから、混ぜてもらった。はじめは知り合い同士のチームに部外者が入っていいのかなって思ったけど、

どうもみんなお人よしだから、すぐ馴染んだ。今じゃこうして頻繁に会って走りこんでるってワケ。

「こうしてみんな集まって顔を合わせるのも2週間ほどありませんでしたし、すこし久しぶりに感じますね」「イクノまでそんなこといって、あたしだけかあ。一つと変わらないのにどんどんおばさんになってくなくなあ…トホホ」

「でも、ネイチャはそれだけ毎日を楽しく過ごしてるってことなんじゃないかな？ほら、楽しいことはスグ過ぎるって言うし。」

「たしかに、そういう考えもありますね」

ゆっくりおばさん談義（なんだそりゃ）に花を咲かせていると「そろそろはしろうよ」と言わんばかりの顔で元氣代表大臣が尻尾をふりまわして見てくる

「おー、そうだそうだ、久々なんだしそんな話してる場合でもなかったね。さて、そろそろ出よっか」

「よおっし！バリバリとばすぞー！」

「タイヤは使い切らないでくださいね。」

「うゝし、がんばるぞゝ、えい、えい、むん！」

今日は新しくつけたエキマニ、それに合わせて仕上げたセッティングのテストも兼ねてるから、とりあえず前の三人は先行させて後ろから様子見してみる。

(明らかにトルクがリニアについてくるようになってる。前にフライホイールを変えた時にも感じた変化だけど、さらにレスポンスが上がってる。それに今回のチューニングで155馬力を回った。相当調子いいぞゝ)

パワーアップに一番貢献していたのは最初にやったマフラーとエアクリナー、コンピューターあたりだけど、そのあとにやったことも含めパワーはそこそこ高くなった。ただ、これもマックスじゃないし、(なんか嫌だから) ボアアップをしないにしても、

もうすこしNAでパワーを上げたいけど、今はとりあえず満足。足もかるく緩めてみたら、路面のバンプの吸収がうまいこといったから、正解だったと思う。(タイム計測してないから何ともいえませんが)

：

「あちやく、ブレーキケッコキきてるね。ターボ、ブレーキ粘りすぎなんじゃないかな。限界を切り詰めてフルブレーキングを繰り返せば、タイヤにもブレーキにもわるいからさ」

「ううん、じゃあどうしたらいいんだろう？」

「もうすこし早めにブレーキを踏み始めて、奥まで踏み切らずブレーキを離すところは今までと同じ、という風にすれば、タイヤブレーキ共に保護になると思いますが。」

「タイムアタックやバトルじゃないなら、その方がいいね。」

「う〜ん…ターボそこまで細かいこと考えられないよ。」

「あつはは〜。まあこの辺りは慣れだからねえ。とはいえど、二年もやってるんだし、ポチポチできないとだよ〜？」

「あ、そういえば。ネイチャが来たら、お願いしようと思ってたことがあるんだけど、いいかな？」

「ほほ？ネイチャさんにおねがいとな。言ってみんしゃい？」

「セツティングを変えてみたから、外からも軽く様子を見てほしいと思って。それでどうかな、と」

「ほほ。バトルのお誘いとな？言うようになったね。マチタンも。なら断る訳もないし、いっちょやったりますか。けど、アタシがない間にターボやイクノにチェックしてもらうんじゃないかだめだったの？」

「それでもいいけど、できれば同じFR乗りのネイチャに見てもらった方がいいかなって。二人のアドバイスよりもわかりやすいし！」

「ほ。そういうことなら、一肌脱ぐとしますか。下りだよ。そしたら上行って準備しよっか」

みんなして頂上までいくと、ささっと車を並べて準備する。いつものメンツだからそのあたりは早い。

「そしたら、ルールは先行後追い。あたしは後ろから追っかけるから、スタートするときはパッシングだして。」

「いつも通りだよ、OK！そしたらはじめよっか！」

タンホイザのS13がスタートしたのを確認して合わせるように発進する。

「私たちが見た限りでも、コーナー一つ一つの無駄はかなり省けていますし、期待はできますね。」「ケド、ネイチャは速いからなく。ターボはネイチャに一票！」

そんなこんなでバトルが始まった訳だけど

（おお）。こりゃ変化がすぐわかる。明らかにコーナーでの挙動が安定してる。コーナーひとつひとつを前と比べらんないくらいキレに曲がって見せる。それにテクの方もそれに合わせて仕上がってる。少なからずショックだなあ。こんなに一気に上手くなれると。）

でも弱点はある。S字コーナーでの車の反転が追いついていない。あまり傾きすぎないドライビングだから目立たないけど、これならいける。仕掛けるなら最後、あのS字コーナーがいい

（やっぱ張り付かれてる。離せない。先行後追いのルール上このままもつれ込んでもおそらくこっちの負け、このストレート、そっからの左で出来るだけ離して…）
「離してくるポイントはこのあたり、だよ。得意なところを生かせるいいドライビングだけど、それ以上に弱点が大きく露呈してる。ここでアウトからハナツツラを

ちよいとねじ込んでやって……！」

外側から並びかけ、インとアウトが入れ替わるタイミングでオーバーテイクを図る。古風なカウンターではあるけど、コーナーでの動きを封じつつ抜ける。この狭い峠道ならなおさら効果はでかい。決着だ。

「いやゝわるいわるい。大人げなかったかな。」「ううんいいよ。そもそも、わたしから挑んだ勝負だし、きっぱり私の負けってことで！それでさ、なにかわかったかな？熱中しててわかんなかったってのはナシだよ？」

「そんなのはさすがにないですよ。とりあえず、コーナー一つ一つのうごきはすっごく良くなった！ただ、いっこいっこ頑張りすぎて、S字で車がついてこれてないかな。だからS字の場合、手前のコーナーである程度次のために準備しておく必要があるワケ」

「ほゝ。勉強になりますゝ。」

メモ帳を取り出していそいそと書き入れてる様子を見て、やっぱり努力の才能あるなゝ、なんて思う。結局、才能ってのはスタート地点の違いで、その差は必ずスタートした後に縮められるもの。故に最も重要なファクターは、

「努力できるかどうか」だと思う。こんな年になってから、気付いたことで、きつとあの頃に気づけていたなら、なんて思う。

「お、上がってきた！」「いやはやゝ負けました。それものすごいきれいなカウンターアタックで！あんなにかんぺきな見せられちゃうと、もうびっくりしちゃうよ！」

「そんなにすごかったんですか？」「そりゃあもお！見たらわかると思うよ！」
「も、そんなに言ったってなんにもでないよ？」

——不意に、 エンジン音が耳に入ってきた。

「…なんだろう、この音。重い…直6かな。それ以外の音もかなり」「ここに人が来るなんて、ずいぶん珍しいなあ」

上ってきたのは6台。そのすべてがボディの左に、同じステッカーを貼っている。車を止めると、走り屋と思われる男たちが出てきてそのうちのひとり、が言った

「俺たちは、グリーンラインで走り屋のチーム、ソニックスターズをやってるもの

だが、このチームの人か？」

3人と目を合わせると、便宜上リーダーを張ってるイクノが前に出た。

「一応、私たちは「カノープス」というチームでやらせてもらっています」

「そうか。はつきり言えば、俺たちは県内で最速を目指している！そのためにも、今度の土曜に、ここでのバトルを申し込みたい！」

「**県内最速**」それは、走り屋の世界でひとつ、強さの証明となる称号だ。走り屋というものは、当然ながら違法行為、言ってしまうえばダークゾーン故、誰が最速かを明確に定義できない。ただ、こと県内という比較的ローカルな範囲なら

その最速の称号を走り屋の中で明確にすることができる。

イクノがこちらの方に視線を送ってくる。ターボとマチタンに視線を送ると、二人ともやる気の様子だ。うなずくと、イクノは

「わかりました。勝負はこの場所で土曜日に、ということですね？」

「ああ。最初は交流として9時から走って、10時になったらバトルをする、ってのだ。登りと下りで代表をお互い一人ずつ出してバトルをするんだ。

「わかりました。でしたら、土曜日の9時にまたここで。」

「話が早くて助かるぜ。そしたら、今日から走りこませてもらうぜ。走るうえでのマナーはキッチリ守るさ。」

そういうと、そのチームのメンバーは車に戻り、Uターンしていく。前から順に、180SX、S14後期、A31セフィロ、N14パルサーGTiR、R32GTiR、P10プリメーラ。見たところ日産ワンメイクのチームみたい。

「県内最速かあ。こらまたキラキラした目標をお持ちなようで。」「ケド、見てるだけってわけにもいかないね。私たちも行こう!」「そうねー。地元の走り屋として、他所モンに突っつきまわれんのも気分悪いし。」

なんだか、年甲斐もなく、って言うのと違うかもしれないけど、こんなにワクワクしたのは久々かもしれない。

「足元軽くすくうくらい、やっ तरीますかあ!」

そうして、またキラキラの夢を見るかもって期待した自分自身のために、走ろうと思った。傷つくものは自分のプライドくらいしかない。それくらい賭けて、全力でぶつかってやろうと、本当に久しぶりにそう思った。

P2 へ続く

あとがき

趣味感覚ではじめたがきんちよ作のシリーズなのでまちがいなどございましたらご指摘ください。不定期更新です。

実は `pixiv` に同様のシリーズを上げていたことがあるのですが諸事情あり削除してこちらに加筆修正し投稿することとなりました。

そのため第五話まではいっきに投稿されますが、それ以降はかなりペースがガタ落ちして、週一投稿できないくらいになることもご容赦ください。クルマ用語がかなり多いので、その話のあとがきに記載致します。

用語コーナー

NA
ロードスター

正式名称は「マツダ ユーノス・ロードスター。」1989年にマツダより発売されたスポーツカーです。「NA」とつく理由は初期型がNA6CE型であるからです。1・6リッターの排気量に軽量オープンボディで人気を博しました。

ハチロク

トヨタより発売されていた「カローラレビン」および「スプリンタートレノ」の四代目モデル「AE86型」の略称です。中古車価格の安さ、1.6リッターに軽量のボディ、レーシングドライバーや漫画の影響から人気を博しました。

テンロク

1.6リッターの排気量のエンジンを指す言葉です。ほかにもテンゴ（1.5リッター）やテンパチ（1.8）、ニーゴ（2.5）などがあります。

EP82 スターレット

「トヨタ スターレット」の4代目モデル、前輪駆動モデルを指す言葉です。単にEP82と呼ばれる場合もあります。軽量な車体に癖のあるターボエンジンで人気を博し、その特性は「ドツカンターボ」として親しまれました。

FF

有名RPGの略称にあらず、前輪駆動の車を指す言葉です。フロントエンジン、フロントドライブから来ています。

ツツコミ

ボケの反対にあらず、コーナーを攻める際の進入速度を表す言葉です。

S13 (J's)

「日産 シルビア」の五代目モデル、S13型を表しています。J'sというのは快
装備の省かれた廉価グレードです。デートカーとして作られた一方、スポーティ
なフォルムに後輪駆動という設計から走り好きに人気を博しました。

GC8

「スバル インプレッサ」の初代モデルで、2リッターの排気量にターボ、四輪
駆動のセダンのモデルです。ハイパワーターボ十四輪駆動のパッケージで人気を博
し、ラリーでも目覚ましい活躍を見せました。

(セダンとは車のボディタイプの一種。)

エキマニ

エキゾーストマニフォールド(マニホールドとも)の略。エンジン内で発生する
排気ガスを整理する排気管です。

フライホイール

エンジンの回転を維持するためのパーツです。慣性を利用しているため、軽量にしたり、形を最適化すると、レスポンス、つまり反応が速くなったり、燃費が良くなったりします。

マフラー

車やバイクにおける排気ガスによって発生する音を調整する機構です。構造の変更等でパワーアップの見込めるパーツです。

エアクリーター

エンジンに送り込まれる空気に異物が混ざらないようにするパーツです。交換により効率よく空気を取り込んで、パワーアップが見込めます。フィルターを取り換える純正交換式、形ごと変えるキノコ型など存在します。

コンピューター

エンジンは燃料や点火をコンピューターによって制御されており、新品だと、かなり余裕を持ったプログラムである場合が多いです。これを限界に近づけ、パワーをあげることができます。

ボアアップ

エンジンのシリンダー（ピストンを収め中で燃料を燃やすもの）を大きくして、排気量を増加、それによるパワーアップをすることです。

NA

ナチュラルアスピレーションの略称で、日本語では自然吸気といいます。過給機、つまり空気を吸い込む機構を使わず大気圧のみで空気を吸い込む方式です。出力では過給機付きに劣るものの、レスポンスやきれいな排気音が特徴です。

足

車における足というのはタイヤ、サスペンションなどのことで、こういったもの全体、およびそれに関連するパーツを「足回り」と呼ぶことが多いです。「足を緩める」というのは、バネを柔らかくしたりしてうごきをふやすこと。反対に「足を固める」というのはバネを固くしたりして動きを減らすことです。

フルブレーキ

簡単に言うなら急ブレーキのコトです。持てる制動力の限界で停止をすることです。レースなどではコーナーで限界の速度で曲がる際にもそういった言葉が使われます。

FR

フロントエンジン、リアドライブの略で、前にエンジン、後ろのタイヤが駆動する方式のことを言います。

下り

勾配の存在する峠道では、登りと下りの両方があり、それぞれ「ヒルクライム」「ダウンヒル」と言ったりします。

先行後追い

道幅の狭い峠において、車同士のバトルとなると、単純に横並びで発進してゴールタイムを競う方式はやりにくいいため、あらかじめ先行、後追いを決め先行は相手を突き放せたら勝ち、後追いは相手にくつついていけたら勝ち、という風に取り決め、お互いが決着がついたと思うまで続けるルールです。

パッシング

本来であればレースなどで相手を追い抜かすときに使います。この場合はパッシングランプのことを指しています。

ハナツツラ

クルマの前部分を指す言葉です。明確な定義こそありませんが、大抵ボンネットの半分くらいまでを指していると思われれます。

イン アウト

コーナーの内側、外側を指す言葉です。

オーバートイク

パッシングと似た意味の単語で、車を追い抜くことを指す言葉です。

カウンター カウンターアタック

反対、反撃等を指す言葉です。レースなどではこれに転じてコーナーのアウト側から相手に並び、次のコーナーで自分がイン側となって相手を抜かすテクニクのことを指します。

直 6

直列 6 気筒のエンジン形式の略称で、縦にピストンが 6 つ並んでいる形式です。後述する R 3 2 型スカイライン GT-R などがこのエンジン形式で、ロードスターやシルビアは縦に四つ並ぶ直列四気筒となります。

走り屋

車を愛し、車を速く走らせるのが好きな人の総称です。また、この言葉を公道で違法レースを行う人の総称として扱う場合もあります。（今作では主に後者）暴走族と違い単に走りを楽しむ目的のことが多いですが、いずれにせよ違法な行為であることをご注意ください

バトル

走り屋の中でのレースの別称。

180SX

日産のスポーツカーで、S13型シルビアの兄弟車にあたる。開閉式のヘッドライト、リトラクタブルヘッドライトに、ハッチバッククーペのボディで差別化を図り、走り屋の間で人気でした。

S14

シルビアの6代目モデルです。大型化し、3ナンバーとなりましたが、様々な面で進化を遂げました。しかしスポーティさを巨大化によって損なわれたと言われ、しまいS13ほどの人気はありませんでした。前期と後期でフロントマスクが大きく異なることも特徴です。

A31セフィーロ

日産 セフィーロの初代モデルです。スカイライン、ローレルといった日産車と構造の一部を共有する姉妹車で、ドリフトベースとして愛されました。33歳のセダンというキャッチコピーがあり、執筆当時33歳であった現実のナイスネイチャと絡めたカメオ出演的な意味合いがありました

N14 パルサー GTI-R

日産 パルサーの四代目モデルです。GTI-Rはグレード名で、シルビアなどにも搭載された2リッターターボエンジンをチューニングしそれに4輪駆動のパッケージでラリーでも活躍しました。タイヤがパワーに対し小さいためタイヤがすぐ削れる弱点も持ちます

R32 GT-R

日産 スカイラインの8代目モデルR32型に設定されていたグレードで、280馬力のツインターボエンジン、FRと四駆のいいところのシステム、ATTESA E・TSに、剛性に優れたボディでレースでも大活躍しました。

P10 プリメーラ

日産 プリメーラの初代モデルです。欧州車を強く意識して開発され、その優れたハンドリングとフォルムから「FF版スカイライン」と呼ばれました。

ワンメイク

レースの世界で、単一の車種、もしくはメーカーの車のみ限定することを指します。

地元

本来は生まれ育った場所を指す言葉で、走り屋やレースの世界では、多く走りこんでいるコースを指すこともあります。

P2 交流戦！

注意

本作品はフィクションです。実際の公道での暴走行為、違法改造等を助長するものでないことを深くご理解ください。本作品はウマ娘プリティーダービーの二次創作であり、非公式であるということをご承知おきください。

ジュブナイルとは、13〜19歳の、いわば少年期を指す言葉

あたしのジュブナイルに当たる時期は、ハッキリ言えば面白みがなく、中身の薄いものであったと思う。一般的に、そのあたりは夢を見始め、それに向かって走り出す時期だと思う。

あたしの場合、それを諦めた時期にあたるから、普通の人よりつまんないのは当然だけど。何もなかった訳じゃない。充実した生活も、おふくろとの時間も、友達だっていた。商店街の人も良くしてくれていた。

主に不満なことなんてほとんどない。ただ一つ、あたしの前にだけ、キラキラがなかっただけで――

ズキン、と。

珍しく目覚ましより早く起きた。なにせ仕事も早いもんだから、めざましはそこそこ早めに設定している。

「けど、2時半で…」

昨晩はあんな宣戦布告があったもんだから、早く寝れてないのに、これじゃ3時間も寝れてない計算になる。不思議と寝ざめはいいけど、それでも体にある奇妙な倦怠感はぬけない。かといって二度寝すればそれこそ闇からは抜け出せない。

…せっかくだし、朝ごはんはすこし豪華に食べていこうかな。(と言えどいつもの簡素な納豆ごはんともみそ汁のコンビに余ったもので作った鮭のホイル焼きがあるだけデスガ)

片道一時間の職場、そこから新潟やらなんやらまで運びこみをやったりなんたりして、そういうのが今の仕事。スタミナこそ消費するけど、給料はいい仕事。ただ、今日みたいな日はすごい地獄だ。

：そうして家に帰り着いたころにはボロボロだった。これじゃ週末の交流戦が思いやられるな、なんて思いながらベットに倒れこむと、そのまま意識を意図せず闇に放り投げた。明日は今日ほど早くないことも救いだな、なんてかんがえたのは起きた時だった。

交流戦まであと3日

次の日の朝になって昨日より質素な朝食をとっていると、イクノから電話がきた。「もしもしくナイスネイチャです」『おはようございます、ネイチャさん。今度のバトルの件なのですが、少々情報が手に入りまして。』「ほうほう」

ごはんをほおぼりながら聞いた話をまとめると、下り代表が180SXのtyp e・X、上りがGT-Rであること、またその二人はケックコーワガママハイスペックなマシンに乗っていること。それから、ソニックスターズの面々は県内最速の呼び声の高いチームということだった。

「そりゃあ、不利なんじゃない?」『はい。苦戦を強いられることは確実です。そこでなんです、今晚正丸峠のほうまでお越しただけませんか?』「作戦会議、ってことね。けど、どうしてわざわざ正丸に?」

『一応、手の内を易々と明かすわけにもいかないと思ひまして。八時半でございますか?』「おつけ。そしたら、正丸の茶屋の前で。」

正丸峠は飯能市と横瀬町の間の峠で、道が狭くておまけにバンピーっていう、最高にハードな峠。全開になんてとてもできないところだ。昔「師匠」にそこで鍛えられていたのを思い出す。

その夜

「おいつす。ちょっと遅れちゃったかな。」「いえ、ほとんど丁度ですよ。」「それで、作戦はどういう風にするの?」「いえ、それはネイチャさん自身に考えてもらうのが適切だと思ひまして、作戦とは別にこれを渡そうと。」

そういつて渡してきたのは、キノコ型のエアクリナーだtt

「エアクリナー!?! ちょ、イクノ、どうしたのコレ!?!」「本来なら来月のネイチャさんの誕生日にわたそうと思ひていたものなのですが、今回のバトルのことをかんがえて早めに、と」「いやいや、その、うれしいけど、その、いいの?」

「はい。以前よりほしいとおっしゃられていたので。」「いやはや、こ、こらどうも:。」「計算ではおそらくコンピューター周りのセットも含め6馬力アップが見

込めます。この辺りはまた現車あわせをしてもらった必要がありますが、これで勝率はあがるかと」

「…なんだか悪いなあ、こんなにいいものもらっちゃって。」これはネイチャさんのため、という意味もあります。地元のプライドを守りたいという意味もこめています。下りは任せました。何かあれば連絡してください。では、ご武運を。」

「うん…ありがとう。あたし、勝つから、イクノも勝ってね。」

交流戦まであと二日

次の日の夕方、少し早めに切りあがった仕事から帰ってロードスターの主治医の町田さんの所へ行ってみる。

「こんにちはー。」「お。きたね？待ってたよネイちゃん。さ、ガレージの方持ってきて。」「へ？えっと、あたしまだ何も…」「いんや、イクノちゃんから話は聞いているよ。そのクリーナーの取り付けだろう？さ、早く始めちまおうぜ。」

そんな至れり尽くせりあるかあ！と心の中でイクノに感謝しつつ、取り付けとセツトを主治医の町田さんたちに進めてもらう。

結果、6馬力どころか9馬力ものパワーアップで、約165馬力をマークした。

「Oh…」「なっはは。言葉も出ないかい？さ、今度のバトル、俺たちも見に行くからな。勝っても負けても、ダサイとこだけは見せんなよ？」「は…はい、ありがとうございます!!」

勢いで頭を思いつきり下げてしまう。ここまで期待背負って負けられない。地の維持と、みんなの意思。背負うものが自分のちっぽけなプライドだけじゃなくなった。勝負は明後日。

そこまでに腕もついていかせる。これはもうあたしだけの戦いじゃない。

交流戦まであと一日

本番の日は休みだから、昼間にタイヤ交換の予約をしておいた。すなわち今のタイヤはぼろにしてもOKということである。仕事をいつもより遅いくらいの時間に終えて帰ると、すこし作戦を考えてみる。

弱点はやはり車重だろう。こちらはあたしふくめ1トン強の車重にたいして、相手はイクノ曰くターボでがちがちのロールバーまである。なら、考えうる策はひとつ。今日は定峰で練習して、そして明日。きっと大丈夫。そう体に言い聞かせながら、夜を過ごした

交流戦本番

昼間にタイヤの交換はすませた。新品のスポーツタイヤとエアクリナーを引っ提げて土坂へ赴く。

「おいつす。マチタンはまだ来てない?」「まだ来てない…あつ!見て!」「みんなこんばんわ」「これで全員ですね。」「んにしてもすっごいギャラリーですなあ。こんな量は初めてかも。うくさらに緊張してきた…」

「リラックスだよ、リラックス、ほら、リラァ〜ックス」「んふ、ちょ、それキク、ふふふ」「ねえイクノ!ターボ走ってきてもいい?」「はい。これだけのギャラリーですから、気を付けてください。」「私も行く!ネイチャは?」

「あたしはここで待ってる。タイヤ残したいからさ。敵チーム思いつきりかき乱してきてよ!」「私も待っています。」「わかった!よし!ターボバリバリ走ってるぞ〜!」

「ネイチャさん、作戦のほうは?」「ばっちり。そういうイクノもダイジョブそうだね。」「はい。あとは本番を待つのみです。」

峠を包む熱気が徐々に増していく。いよいよ本番だと理解させられる。この高揚

感を収めるには、もうバトルしかない。ふたりして、その時間を待つ。

すると、見覚えのあるマシンが視界に映り始める。グリーンスターズ御一行、到着だ。降りてくると、180の男が話を始める。

「わるい、遅れたか？ 登り代表が遅刻してな。」「それは悪かったっていったらう、相沢。」「ああいや、ぴったしくらいですよ。それにそっちの練習時間が削れる分にはメリットなんですし。」「ま、そうか。そしたら、はじめはつるんで走って、本番は10時からだ。」

「はい、先日の通りですな。」「こっちの代表は180と俺、相沢和志が下り担当、こっちのGT・Rと兼井大地が登り担当だ。そっちは？ 直前まで開示ナシってんなら受け付けるが。」

「いんや、それじゃフェアじゃあないですし、こっちも。あたしとロードスターが下り担当で、「わたしとインプレッサが登りです。」「よし。そしたら、十時までは好きなようにしてくれ。俺たちもそうさせてもらおう。」

相手チームも、代表の二人以外はクルマに乗り込み下っていく。こちらと策略は同じ、万全の状態を挑むようだ。

すると下り代表と名乗った相沢さんがこちらへ来る。

「相沢だ。よろしく頼む。」「はい、よろしくお願いします、と。なにも、名前まで開示することはなかったんですよ?」「いや、それじゃあまり意味がなくなってるな。俺としては、この埼玉県内の最速を目指すうえで、うまくいこうが失敗しようが、名前が残るようにしたかったんだ」

「ほほお?それはどうして?」「自分の名前が知れば、それに挑もうとする人も増えるからな。俺はチームのみんなで強くなりたから。そういう意味では県内外から挑戦をしてくれる人もいて成功しているって言える。」

「ふむ。いやはや、まぶしいですよ、そんなに前向きで。あたしには到底届かないですね、そんなまぶしさには。」「そんな前向きなものでもないさ。結局のところ、俺はあぶれもんだ。だから、そんな俺を手助けしてくれた人に見限られないように必ず死なだけなんだと思う。」

「案外、そうでもないかもですよ。リーダーとして信じられる人だと思って付いてきてる、って。そういう風にもみえましたけどね。」「: そうか。なんだか悪いな。言わせたみたいで。」「いえ、お世辞なんて言ってますし。それよりも。あたしは今

日のバトルが楽しみなだけですよ」

「ああ。お互いにとつていいバトルにしよう。」

そういうと、相沢さんはメンバーのところへもどっていった。

次第が増えていくギャラリーの中に見知った顔が紛れているのに気付く。その見知った顔はこちらを見つけるやいなや駆け寄ってくる。

「ネイちゃん！探したぞあちこち！」「あくはは：探さないでもいいんに、町田さん、きてくれた：んだね。」「当然だ！勝っても負けても、このバトルだけは見に来るさ。ネイちゃん、意気込みはどうだい？」

「ハッキリ言えば、あまり自分に期待はしてない。けど、期待をそこそこ背負ってるんですから、その分も頑張りは、します。けど、ほんとに期待しないでね？」「あっはは！たく、自信持ちなよ。なんせ俺たちが仕上げたマシンだ。勝てるはずだよ、ネイちゃんなら！」

「…：そのまま言われちゃ引けないなあ。頑張ってるから、見守っててよ？」

「おうよ！がんばれよ！」

そういうと町田さんはまたギャラリーの波の中に消えていった。：ほかのシヨツ

プの仲間とかもいたような気がするけど、キニシナイ。

「とにかく、自分にできる最高のレースにする。それだけは絶対。そのためにも、ロードスター。あんたの力が必要だから。頼むよ。」

ひとつこ一人聞こえない。ただクルマとの一対一の対話をすませ、心を整える。そして本番は、気持ち早くやってきた。

「それじゃあ、10時になるから、バトルを始める。みんな、車どけて準備始めてくれ!」「おおおおお!」「盛り上がってきたね!」「ネイチャ、イクノ、頑張つて!」「リラックスだよ!」「うん、ありがとう。ふー…よし、行ってくる。応援、しててね。」

そういつて歩いていく。観衆が沸き立って、一気に本番ムード。こちら車も並べる。とそのままに

「位置はどうする?どっちが先でもいいけど。」「なら、1本目はこっち先行でもいいか?」「オツケー。じゃ、車並べちゃおっか。」「その前に、すこしいいか?君の名前を教えてほしい。これはチームとしてじゃなく、1人の走り屋として、だ。いいか?」

「：ナイスネイチャ。いいバトルにしようね、相沢さん」「ああ。ありがとう。」
クルマをパパッと並べる。

当然、緊張している。けど、同時にこの緊張という「庄」を心地よく感じている。
怖い怖いけど、これほどの興奮は初めてかもしれない。勝っても負けてもこの
感覚をわすれないようしっかり浸っておこう。

「カウント5秒前!!」

「4」次に、感覚がさえていくのがわかる。まるで1秒がずっと長く感じれるほど
作戦はできてる

「3」

マシンは完璧な仕上がりだ

「2」

視界は夜とは思えないほどクリアだ

「1」

「GO!!!」

クラッチを離して加速を始める。前のマシンの方がホイールスピンをしている。収束はかなりこっちの方が早い、それがあっても加速でかなり負けてる。コーナーが近いのが救い。

そして初めにわかることとして、相手のマシンは若干ピーキーだ。踏みすぎればずるっといきそうな、けれどかなり高レベルで制御できてる。ただ、立ち上がりでのカウンターとかでは誤魔化しきれてない。対してこっちはどうか。かなり踏んでいける。それと、上がったパワーも予想より安定性に響いていない。

その割アクセルを開けやすい区間の離れ方も予想よりたいしたことがない。

「—いける。あたしの方がうまい。これなら後半戦：ツツコミを切り詰めるよりタイヤの温存を意識したほうがいい。」

「つちい。ついてくる。テクニカルコースのここにはあっちの方があってる。こっちも265馬力。トラクションもフラット。なら離せると、考えが甘かったか。フラットでピクアップのいいトラクションは唐突なオーバーステアを招く。これは事前にわかっていた

アンダーを強めるセットにしたけど、これがあだになってる。S字複合での車

体の反転が、ベストな動きでも相手に遅れを取る。それだけじゃなく、相手はタイヤの温存までできる走りだ。こっちも温存してるけど……それじゃ勝てない。二本目、後追いにかける！」

「二本目はいったねえ。疲れないかな？ターボ、全開バトルだと、一本で疲れちゃうもん！」。「たしかに、ターボさんは二本目にもつれ込むとだいたい負けていますからね。」「けど、ネイチャはかなり持久戦もできてるからなあ。二本目じゃ決着つかないかなあ。」

「ええ。お互い疲労はしてなさそうですし、三本目も確実にしよう。」

「二本目始めます！5！4！3！2！1！GO！！」

二本目。先行は苦手だけれど、作戦はある。ついてきなよ、こっちのターンはもう始まってからね。

（二本目に入るとは想定内だった。でも、今、想定より明らかにタイヤが削れる。どこも不調はない。であれば、俺がプレッシャーに負けている、ということだ。でも、相手のペースが落ちている。ツッコミがあまい、そこだ！）

「かかった！」

インを差そうするのを確認して大胆なコーナリングへ切り替えてブロックして、インとアウトの逆転するコーナーで離せば！

「ぐ、レイトブレーキングを無駄遣いさせられた、もう一発、全開区間先の左で！」
そう、するだろうね。プレッシャーはやばいけど、感覚は信じられないほど冴えてる。さあ、いくよ…！

(インを、開けた…？突っ込むしかない、けど！)
もらった。

並びかけてくる。サイドバイサイドになる。そのタイヤのグリップじゃ、いけな
いはず！

「しまっ！滑る、もどれ…！」

相手はオーバーステアを出したけど、こっちは大丈夫。復帰したけど、あれじゃ
タイヤは削れる。三本目でどうか、と。

「3本目いきます！」

「相沢のやつ、不利だな。どう考えてもタイヤ差が響き始めてる。」「ああ。頼むよ、
相沢さん、ここが勝負をかけられる最終段階だから…！」

「GO!!」

「相手、焦ってるなあ。かなり無茶なプッシュ。おそらくこの感じであればマチタンのときと同じでいいはず。あとは精度の問題…!」

(タイヤはもうガタが来ている。レイトブレーキングをしすぎた、このままじゃ負ける、このままじゃ、ストレートでなんとか、こっちは260越えの馬力、ロードスターじゃ簡単には来れない、あそこでめいっばい開ければ…!!!)

「ストレートでなんとか誤魔化していても、ペースの落ち方は尋常じゃない。高速区間からのブレーキがさらにグリップに影響する!そこだ!」

立ち上がりでの不安定さを突く、左から被せる、このまえばコーナリングスピードの違いだけでいけていた。なら今回は、それ以上、コーナーのターニンイン終盤でタッチ程度にサイドを引く。リアがグリップをなくして、グリップの残るフロントは回転で横を向く。

フロント部分で相手の頭を塞いでコーナリングスピードを落とす、これなら感性を生かしつつ反対を向けば…!

「な…そんな…スーパードリフトが…」

一つ目のコーナーでのオーバーアクションはブロックだけじゃなく、次のコーナーのフェイントモーションも兼ねていたんだ…こんな完璧なカウンターアタックが、俺に出来たろうか…すげえよ、あんた…」

「はあ…勝った、のかな。正直、集中しすぎの疲れすぎで何にもわかんない、とりあえず、空気を吸おう。そうすれば整理つく…はず？」

「お！出てきたぞ！すげえよあんた！あの相沢に勝っちゃうなんて！」「え…え…と？」「んもう俺もゾクゾクしちゃったよ！」「すごいね！私もぜんっぜん追い付かなかっていうのに、それを完璧に!!」「いや、ちよいちよい！あたしそんな!」「謙遜するなよ！ほら勝ち誇って！すげえことしたんだぜあんた！」

訳もわからないように歓声を浴びせられる。そうした中でようやく整理できた。勝ったんだ。埼玉一っていわれたチームに、あたしなんか。

「負けた…な。まるで文句のつけらんない勝負だった。ともかく、これで県内最速のプロジェクトもおしまいか。」「そんなことないっすよ相沢さん！またリベンジすりゃいいじゃないですか!」「…けど、俺にはもう」

「心配すんなよ！俺たちも手伝うぜ！また腕え磨いてこうぜ！」「…え？」「僕も手伝いますよ！勝負になるかわかんないっすけど、このまままけっぱは悔しいですから！」「…いいのか？俺は、負けたんだぞ？」

「関係ねえよ！お前は俺たちチームの誇りなんだ、俺たちをここまで成長させてくれたんだ、このままやめるなんて言わないでくれよ！」「…そう、か。そうだな。…まだ、俺なんかのワガママに、つきあってくれるか？」

「当然ですよ！リーダー！」「…ありがとう。俺まだやってみるよ。けど、まだ登りもあるんだ。これのあとにやらせんのはちっと荷が重いからなあ。っと、噂をすればなんとやら。」

「よ、相沢。派手に負けたみたいじゃねえか。」「ああ。わるいな。」「ま、登りはまかせな。勝てるかかなり疑わしいけど、やってみる。」「ああ…頼んだ。」

「や、イクノ、登りはできそう？」「ええ、作戦は練ってあります。一本でおわらせてきます。」「言うね〜。見させてもらおうよ？」

「登り担当の兼井だ。よろしく。」「イクノデイクタスです。こちらこそよろしくおねがいます。」「さあてあたしの仕事は終わったし、じっくり見物かなあ。」

「カウント始めます！5秒前！5^{E3}4^{E1}3^{E2}2³1-

GO!!」

後追いを選んでくれたのはこちらとしては好都合でした。相手はハイパワーながらかなりうまいこと付いてくるいいドライバー、ですが、それが命取りです。

「いいぞ、このペースなら勝てる…相沢の仇は、俺が…！」

「甘いですね、おそらく、このままではついてこれないE」

一瞬でいい。制動力の働かないギリギリまでブレーキを踏みこむ。このコースの中で最高速を記録する区間でのフェイントブレーキングE逃れられない

「!?なに!?…畜生、フェイントだ…汚い手E使いやがって、逃がす…か…

なんだ…よ、あのペース、ありゃ、フェイントなんかなくなっちゃったって、勝てたんじゃないのか…？」

「勝った勝った〜！ターボたちの勝ちだ〜！」「アンタは走ってないでしょうが」「すごいよネイチャもイクノも！次はわたしも頑張らなきゃなあ。」「計画通りにいってなによりです。それよりも、今考えるべきは〜…」

「あはは〜…こりゃ簡単に帰してくれなさそうだ…」

こうして、あたしたちの（奇跡的にうまくいった）初の交流戦は幕を閉じた。今日の体験をどう生かすか：そこも成長のカギになる、とかも考えたけど、それよりもあたしの頭には、このギャラリーの対応の仕方が問題になりそうだな〜とか、そういうことを思ったのであった。

P2 完。

P3 へ続く

あとがき

書き溜めなのですぐに投稿できました。

本作を書くにあたってハイパーレブを何冊か購入しました。51号と73号、10

2号です。ロードスターについての知見が薄いので購入したのですが、ハイカムがはいってるくらい馬力だと今更ながら知りました。

軽量コンパクトが武器のロードスターですがハードトップとボディ補強がある
とさすがに1000キロいってそうなので、軽量化の話とかそのうちあると思います。
書き溜めは5話までなのでそれ以降ですかね。

用語コーナー

typerx

180SXの後期型のターボグレードです。

ロールケージ

ボディを補強するパーツです。

クラッチ

回転の伝達、切り離しを行う機構です。車においてはシフトチェンジの際にクラッチを利用し駆動力を切り、負荷を抑えたりします。

ホイールスピン

タイヤが地面に食いつかず、空転をすること。

ピーキー

扱いが難しく神経質になるもののこと。

カウンター

前回でも同様の単語があったが、今回は、コーナーでドリフトをして、その制御のためにハンドルを反対に切ることを指す。

オーバーステア

コーナーでリアタイヤがすべりコーナー内側に向かって行き過ぎてしまうこと。反対にアンダーステアはフロントタイヤが滑りコーナー外側に膨らんでしまうこと。

プッシュ

ペースをあげること

ブロック

相手の進路を塞いで、速度を落とすこと。公のレースでは違反行為として扱われる。(競馬で言う斜行のような行為)

サイド

サイドブレーキの略。パーキングブレーキ、ハンドブレーキともいわれる。
フェイントモーション

P3 余韻に浸る間もなく

かなり遅くなりましたが今後はさらに遅くなりますのでご注意ください。

3、という数字は、どこか嫌に思ってしまう。それは、これまで生きてくる中で3、という数字がおおかったから、というのが一つ。

福引をやるにしたって、競争をするにしたって3に選ばれることが人生の中で特段多かった。

そして最近、夢を見る。そんな「3」の夢を。

何度も何度も、嫌と言うほど、自分のものですらない記憶がリフレインされる。あまりに鮮明に、まるで語られるように、ターフの上に自分を見る。そんな夢が

ガツンと、また音が聞こえそうな頭痛が目を覚まさせる。昨夜セツトした目覚ましがちょうど朝を知らせてくれている。そういえば、時折起きるときにくる頭痛もストレスだ。ほんの一瞬、目覚ましを止めたところにはもうなくなっているけど。

それが週に一回はあるからむかつく。なんかの病気かと思って調べてもわからないし、放っておいてるけどこれもイラつく。

「きょう… やすみ… だっけか」

寝ぼけた頭をクリアにするために顔を洗いに行く。そしてすこし寝ぼけが収まると、昨晚のことを思い出した。あんな興奮初めてだった。

自分のポテンシャルを出し切って、どうやって勝とうか頭を振り絞るみたいにつかって、最後にはなにかも吹っ切れるくらいの高揚感だった。

「あるときだけは… キラキラ… 出来てたかな…」

ぼろっと、そんなことを漏らす。小学生とかのときに抱いてた、夢。もう捨てられたと思ってたのに、まだどこかそれを夢に見るあたしがいるらしい。

二つの夢。望むことと思い出させること。全く違う夢だが、どこか繋がる気がする。

朝ごはんを用意しようと思ってリビングダイニングに行き、テレビをつける。

今朝は安くなっていたパンを食べる。期限が今日までなので、パパッと食べてしまおう。実家を出てからは自炊の回数も減ってすこし手短になりつつある。夜と土日くらいはしっかりするものの、悪い傾向だと自覚する。

そうしてバターをつけたパンを頬張っていると、気になるニュースが流れてきた。「トウカイテイオー、引退を表明：か。」

そういつてニュースでは会見の様子が流れてきた。どうやら6年もの間最前線で活躍していたらしい。テレビに映る会場にはこれでもかと記者がおしかけて我先にと質問を投げかけ、

それを慣れたように受けるトウカイテイオーとその担当「トレーナー」の姿があった。

「本当のキラキラって、こういうのを言うんだなあ…また自信なくしたかも。」

自分の勘違いが恥ずかしくなる。あんなのはただ…ちょっとちやほやされているだけで…なんでもないんだと、再確認した。

記者会見の様子を流し終わると、テレビとしてはそればかり取り上げてもいられ

ないので、5月1日の天皇賞春を引退レースとすることを告げるとすぐ次のニュースになった。

ちょうど食べ終わったので、テレビをけして着替えて、朝の散歩兼買い物に出かける。財布とMD式の音楽プレイヤー、それ用のイヤホンをとって出て、外に出てカギを閉める。

下に行つて、ふと止めてあるロードスターに視線をやる。普段はシートをかぶせてあるけれど、それでもあたしは、そこに目を向けずにいられなかった。

「なんでもないなんて言わない方がいいよね…アンタは…アタシのために頑張ってくれたのにさ…。」

そう言うと、イヤホンをつけて音楽をつける。

商店街までの道のりもずいぶん見慣れた。2、3年はこのあたりに住んでいるのだから慣れて当然かもしれないが、やはり最初は不安が強かっただけにすこし安心したようにおもう。

ここの商店街は、地元の歩行者天国的な雰囲気のあるタイプじゃなく、道路横に歩道があつて、そこに八百屋やらが立ち並ぶ形式。今じゃ馴染んできたけど、やは

り十数年の記憶のせいで違和感は否めない。

目的の八百屋に近づいて、音楽を止めてイヤホンを外すと、今朝も3、4人中外にいるようすがうかがえる。行きつけ、という概念に抵触するくらいにはよく来ている店で、こちらも顔を覚えてもらって訪れると

「おおネイちゃん！いらっしやい！今日はずいぶん早いなあ。」

こんな風に声をかけてもらえる。地元ほどの付き合いじゃないが、半年もしたころにはこんな雰囲気だった。

「おっす。いんにゃ、今日はやけに寝覚めがよかったもんだから、散歩がてら、と思つてね。健康寿命とやらにもいいらしいし、それに冷蔵庫には昼を乗り切れる食料もないもんで」

「なんだうちのカミさんみたいなこと言つてえ。ま、そういうことならゆっくり見てください！まだ客は少ないから新鮮でデキのいいのが残ってるぜ？」

「おう。朝っぱらだとそういうメリットもあるからなく。どれどれ」

そうして目的の品を大方買い終えると、並びの古着屋に立ち寄る。来たばかりのころに、ここで手伝いをやってた、「ヤマノマナミ」さんっていうウマ娘にこのあ

たりのことを教えてもらったことがある。

それ以来買い物帰りにはいつも立ち寄っている。

「マナミさん？」

「ほいほい。ちょっとまってねっと。はいはい、あ、ネイチャちゃん！早い

ね今日は？」

「今日だけで何回聞いたかな、ソレ。」

「なはは。ネイチャちゃん、いつもお昼過ぎに来てて、それがみんなにとっても当たり前になってきてるんだよ。きちんと馴染めてる証拠なんだから嫌そうにしないでいいじゃない？」

「そーいうもんかあ…そう捉えると悪くない…のかな？」

「ま、ネイチャちゃんは、ヒトに好かれる才能、ってのは確かにあると思うな！話しやすくてなじみやすいし、それに…」

「それに？」

「うんにゃ、なんでも？ただ、最近のウマ娘は発育がよくていいな、っていいこと違いたのかなのにねえ？なっははは」

：優しい人だけど、たまにスケベなのは、このひとのある種アイデンティティなのかもしれない。(その乳じゃヒトのこといえないだろうに)

「っと、わざわざ来てもらってこんな話じゃわるいね。この前、乗せてもらったクルマのことなんだけども、私もさ、あれ以来もうクルマの世界にゾッコンでね？私も車ほしいって思うようになったんだよ。」

「へえ。マナミさん。アタシのロードスター乗るまで、そんなに興味ないカンジじゃなかった？(武内イ○キかってんだ)」

「そんなときの私と今の私はちがうのさ。でさ、ネイチャちゃんみたいな後輪駆動の車がいいなって思うのさ。バイト代も貯まってきてるし。なんてったっけ、トレノってやつ？とかボロだけど安いしいいかなって。」

「ほく。1、2週間でそこまで。マジだね？」

「マジマジ」

「ふむ、なら来週あたり、中古車屋でも回る？手伝うよ、あたしなんかでよければ、ダケド。」

「お、ほんと？よっしゃ！なら来週の日曜日、開けておいてね！約束だよ！私、

約束守らない人と煙草吸う人はキライだからね！」

「わあわかりましたからそんなに盛り上がりたくないですよ。あたしはカルくついでくださいなだからさ。」

「うん、それでも私超うれしいよ！」

「マナミ。ちよいと来な〜」

「ありやお母さん。は〜い！それじゃネイチャちゃん、細かいことはメールで！それじゃ〜」

「は〜い。まったく、元気のいい人なこと。こっちのほう年下のはずなのに、気合負けしてるって感じ。」

けどまあ、たまにこうやって買い物をしつつ商店街をまわると、童心に帰れるというか、元気をもらえる。ナイスネイチャの在り方の原点はやっぱり、こういうおっちゃんおばちゃんのいる商店街にこそある、なんて思う。（それってどうなの？）

そうして音楽を楽しみつつ帰っていると、アパートの駐車場にロードスター、セフィーロのならばにS13を見つける。持ち主と思われる帽子の似合うウマ娘は、こちらを見つけて手を振る。音楽を止めてイヤホンをポケットにしまい声をかけ

る。

「おいつす。どうしたのタンホイザ。今日は記念日かなんかだっけ？」

「こんにちは！そうじゃないけど、ヒマだったし、一緒にご飯でも、とおもって。どうかな？」

「お、いいですな。んじゃ、これだけパパッとしまってくるから、まってて」

「今、馬力いくつ出てるんだっけ？このS13。」

「うーんと、180ちょい位…あ、前にちょっとセットを変えたから、175くらいと思うけど、それがどうしたの？」

「いや、前にバトルしたとき、結構加速で離されてたからさ。やっぱSRはいいエンジンだな。アタシのB6じゃそこまで簡単に出ないもんな。」

「けど、ネイチャのロードスターは軽いし、それに足も私のS13より煮詰まっているし。ダブルウィッシュボーンだったよね？S13はストラットとマルチリンクだから、それと比べると足がいまいちになっちゃうんだよね。」

「ま、スポーツカーとして産まれた車と結果的にスポーツカーになった車の差なのか。前に見たときはかなりイイ動きしてたし、ぼちぼち調整してけばイイとこ行

けると思うよ？上達も、ここらへん早いし。」

と、あたし達にとつて他愛もない話をしながら窓の外を見てみると、一台、見慣れないクルマを見た。ホワイトとガンメタのツートンに横っちょには吸気口

「AW11かな。あ、ハイマウントストップランプ。ありゃ最終型だ。」

「このあたりのナンバーっぽいし、走り屋の車かな？」

「どーだろ。最近あんまし走ってなかったしわかんないなあ。」

「つとと、ここだった。はい、目的地到着。ここのおいしいんだよね。」

「で、そのX・90がハイオク入れてて、もう珍しい続きで。」

「見たかったなく。県外ナンバーだったんでしょ？もう見れないだろーな。∴。

あ、時間大丈夫？結構引っ張っちゃってるけど。」

「うーんと、大丈夫！今日は夜までフリーだから大丈夫だよ！」

「それならさ、軽く中古車でも見ていかない？」

「いいけど、まさか、乗り換え…!？」

「ああいや、そうじゃなくて、知り合いがクルマ探してるらしくって、手伝いたいな。」

「そういうことなら、いこっか！時間はたっぷりあるし！」

「おっけー。あ、会計、アタシ出しとくよ。」

「ほー。結構見ないようなものもあるもんだな。このビートなんか調子よさそうだし。」

「かわいいよねー。そういうのも。あ、FRがいいならこれとかどう？180！前期型だからCAだけど、ターボだしいいとおもうなあ。」

「お、いいねー。結構、180も10年落ちの車両が出てくるから、時の流れってのも侮れないな。」

そんな風に見て回っていると、向かいの駐車場に、ボンネットを開けて中をいじっているヒトを見つける。どうやら、あの様子だとエンジンがかからないようだ。

「ごめん、アタシちょっとトイレに。」

「うん、わかった。」

そういつてその駐車場の方へ行ってみる。NB型のロードスターのようだ。

「えっとー、お兄さん？車、どうかされたんですか？」

「え？あ、いやちょっとエンジンがかかなくなって、でも、大丈夫、こんなも

んなら… 行って、つつう。これで…」

しかし、その威勢に反してエンジンはかかる様子がない。

「うくんこの分なら… ちょっと見てもいいですかね？」

「いいけど… 全然わかんなくて…」

「いや、こういう場合は… やっぱし、接触不良だ。これを、ぐっと… あれ、こりゃ接続かなり緩んでるな。このまま、セルまわしてみて！」

すると、さっきまでの煮え切らない音とは違いすっかりエンジンがかかった。

「おお… ホントに治っちまった…」

「接続がかなり緩んでるから、早めにここの… このコードごとバッテリーとっかえちやっただけがいいよ。」

「えっと、ありがとう！ なんてお礼したら…」

「いや、そんなのいいよ、ただ、アタシはこのロードスターが気になったただけだから。アタシもNAだけど、ロードスターのっててさ、しっかりキレーに乗ってほしいなって。それだけ。お兄さん、走り屋の人みたいだし。」

「じゃあ、名前だけでも、せめて恩だけでも覚えさせてほしいんです。」

「だから、いいってんにな。アタシ、ナイスネイチャ。それじゃ。」

「…！ありがとうございます…！」

そうして、そそくさとその場を去った。慣れないことするもんじゃなく、と、そうおもった。

その夜はまた土坂にのぼった。そうすると今度はみんなが揃い踏みだった。

「こんばんは、ネイチャさん。」

「おいっす。見慣れないクルマ二台くらい見たけど、あれは？」

「おそらく先日のバトルの噂を聞いてきた走り屋かと。すでに一度挑戦をうけました。」

「で？」

「勝利しました。」

「さっすが。うちのリーダー、頼もしい限りですわ。」

「いえ、相手はおそらくココが初めての方でしたので、当然の結果かと。」

「そっか。しかし、こうなるとちと気をつけなきゃだなく。これまでは多くてもアタシたちプラス一人だったし。」

——ふと、見覚えのある車を見つける。ホワイトとガンメタのツートンに横っちょには吸気口。そしてハイマウントストップランプ。昼に見たMR・2、AW11だ。

「あんたたちが、この前ここでソニックスターズを倒したカノープスって走り屋だよな。」

「∴ そうだよ。一応、ここであのチームと戦ったのはアタシ達だけだよ。」

「そうか。なら早い話だ。次の土曜日、俺とここで下りのバトルをしないか？」

「∴ 挑戦、ってわけ。」

「ああ。ルールは昨日のルールと同じだ。どうだ？」

「断る理由はないかな。OK、受けて立つよ。けどその代わり、あんまりこのことは騒ぎ立てないでほしいかな。できればバトルのあとで。」

「了解した。俺は紅葉康介。また、土曜9時、ここで会おう」

そういうとMR・2に乗る男、康介はそのまま去っていった。

「間髪入れず第二バトルですね。」

「そうだねえ。うんや、あれケッコウ疲れんだけどな。」

「けど、昨日の調子でいけば勝てるよ！レコード、すごかったしき！」

「うん！ターボも手伝うよ！」

「あっはは。なんで当の本人より盛り上がってるんだかな。」

そうして、第二バトルの予定が建てられることとなった。しかし、相手はミッドシップ。かんとんには勝てないかな。なんて思うけど、心のどこかじゃ、きつと勝ちたくてうずうずしてるアタシがいるんだと、なんとなく考えた

あとがき

執筆当時は4月16日ということで改めましてナイスネイチャ号34歳おめでとうございます。シャルロットという競走馬は40歳まで生きた競走馬がサラブレッドの中で最長寿だとされているため、

すでにとっても長生きさんです。これからも元気でいてほしいですね。さて、本作の話に戻りますが、今回ウマ娘においてもオリジナルキャラを出させていただき

ました。「ヤマノマナミ」という名前ですが、埼玉の牧場に

真波というウマがいるというのを見たのと、ヤマノ、はぽっとおもいつきです。キャラとしては真希波マリイラストリアスと葛城ミサトと武内樹を足して三で割った感じを想定しています。今後も時々登場させたいと思っています。

ほかのウマ娘ですが、現在は、セイウンスカイ、アドマイヤベガ、その妹にあたるウマ娘、それからまだ補欠的なのですがナカヤマフェスタとシリウスシンボリを考えています。史実においてド主人公のキャラは、若干登場させづらいのが

公道レース作品として書いたことの弊害としてありますね。「関東でわざわざレースでなく走り屋をやっている理由」がないともややもやするんですよね。故にナイスネイチャを選定した面もあります。

先日ハイパーレブのGRヤリス号ポリウム2を購入したのですが、あまりチューンが盛んでないというか、専用設計エンジンの弊害が出ているなという印象でした。というか、これは私見なのですがV01100前後と比べて少々装飾が派手過ぎるように感じましたね。

さらに関係ない話に飛ぶのですが、このシリーズをいったん完結させた後、首都

高を舞台にした物語を作りたいと考えています。おそらくまだまだ先ではありませんが、そちらもよろしくお願いいたします。

用語コーナー

SR

日産のエンジンのシリーズを指す。直列四気筒、DOHC（次項で解説）16バルブ（次項で一緒に解説）のエンジンのシリーズである。シルビアやその他の日産車に搭載され、高い強度を誇ることからチューニングベースとして活躍した。

DOHC、バルブ

バルブというのはエンジン内部に空気を送り込む際、また内部から排気する際にそれらを制御するための弁機構のことで、DOHCとはデュアルオーバーヘッドカムシャフト、つまりカムシャフトと呼ばれるバルブを押し引きする棒がエンジン上部に二つ付いたエンジンを指す。

ダブルウィッシュボーン

サスペンションの形式の一種。二つのアームでサスペンションを支えることから来ている。左右車輪を独立して稼働させられる独立懸架に分類される。

ストラット

サスペンション形式の一種。安価かつ小型で単純なことから採用車種が多い
マルチリンク

サスペンション形式の一種。4つ以上のアームでタイヤを動かす。

ハイマウントストップランプ

高い位置に補助的に取り付けられるブレーキランプのコト。MR¹2のAW11に
搭載されるものは厳密にはハイマウントストップランプではないとされる。

AW11

トヨタ・MR¹2の初代モデル。AE86などにも搭載された4AGエンジンと国
産初のミッドシップ車両ということで人気でした。

X¹90

スズキの小型車。コンセプトがあまりに奇抜だったためあまり売れずに終わしま
した。

CA

日産のエンジンで、SR型の前任に当たります。

NB型ロードスター

二代目ロードスターのコト。リトラクタブルヘッドライトを廃止したり、ボディ剛性を高めたりして元のポテンシャルそのままに進化を遂げました。

ミッドシップ

車両の中心（またはそれに近い位置）にエンジンを搭載する駆動方式。

P4 長期戦

いつもとノリは変わりません。

「そこそこかな。明後日のバトル、どう？」

「どうもこうもないかな。自信はまだないけど、ベストは尽くすよ。」

「そっか、じゃ、ターボからアドバイス！ここぞってときは、車を信じて仕掛けてみるといいよ！」

「ほほ。その心は？」

「ターボね、車って生きてると思うてるんだ！だから、思いっきり行くぞってときはクルマのことを信じれば、きっといける！ネイチャも参考にしてみるといいよ！」

「なるほどね。クルマを信じて、か。」

すっと、ロードスターの方を見る。今は、まるで眠っているようにしている。

だけど：確かにこの車は、生きている。ターボの言葉はほんとうだと思う。

シートにおさまって、ステアリングを握っていると、だれにも聞こえるようなエンジン音とかだけじゃなく、深く、奥深くから声が聴こえる。

「それじゃ、ターボ明日早いから、これでね！」

「おいよ。気を付けなさいな。」

：信じられて、なかったかもしれない。そうだ、負けてなんかいない。あんたも、アタシも……

二日後。カーテンを開けて風に当たってみる。これほどまでに高揚することはない。頭を冷やそうと思ってたけど、ぜんぜん意味がない。冷水にでも頭つけるべきかな……

と、ケータイがピロンと音を鳴らす。メールかなんかだろうけど、どうしたんだろう。見れば「明日のことについて」というマナミさんのメールだった。

「しまったあ：ぬけ落ちてたなあ……ネイチヤさんともあろうものが……」

最近、変に忙しい気がするな……

さて、晩御飯は景気づけに外で食べていこう。今日はまた負けたくない戦いなんだから、うんとスタミナがないといけないう気がある。

「あれ、先に来てらっしゃいましたか。」

「おう。万一遅れても嫌だしな。」

「そっか。んならさっそく始めるとしますか。先行後追い、先行はちぎれば勝ち、後追いはべたづけるか、抜いたら勝ち。勝負がつくまで繰り返す方式で。」

「それは前に確認したろ。始める…ん…？」

3…いや4台車が上ってきている。

「おい、俺はギャラリーを呼んだ覚えはないぜ。それなのに、お前が来るってんはどういうことだ。」

「そう身構えるなよ。俺は、そのの嬢ちゃんに言われてきたんだ。」

「へえ、お前も美人だからって簡単にオトしちまうとはなかなかの口だな？」

「はっはは！そういうんじゃないかと、かるくそういう話をしただけですよ。」

「もう集まっていますか。では、進行は私が。」

「ごめんね〜イクノ。こういう仕事頼みつきりで。」

「いえ、気にしないでください。」

「うし。それじゃはじめよっか！ポジションはどうする？こっちが地元なんだし選んでもらっても構わないけど。」

「なら先に後追いで頼む。」

「よし、じゃクルマ並べちゃって！」

正直なところ、先行のポジションになることはなんとなくわかっていた。おそらくこっちのレベルを1本目で図る作戦だろう。

「カウント5秒前！4、3、2、1、GO！」

1本目、全力でやればタイヤを消耗する。相手の作戦がこちらの实力を見る作戦なら全開で飛ばすことはない。

「ほお…結構やるじゃねえか、嬢ちゃん。女だてらに走り屋やってるだけあるぜ。（ちょっと変な表現化もだが）だがこの程度じゃないはずだ。こんなもんなら県内最速と噂されたソニックスターズは負けてないはずだ。」

ヘアピンと呼べるコーナーの存在しないこのコースでゼロカウンターの実現は難しい、ならあえて慣性を利用しカウンターで反転しドリフトをする…この芸当を、

全開じゃないということと、タイヤ温存と両立する。ただものじゃないな。」

「二本目入ります！ 5、4、3、2、1、GO！」

「二本目、じっくり見させてもらうよ、その走り…！」

「へ、へへへ…：すげえぜこのプレッシャー、こうでなくちゃなバトルってのは…！！興奮するぜ、今までのどの瞬間より…！」

うまい、コーナー、そこから立ち上がり、イーブンなようで、立ち上がりで僅かにあつちが速い。ミッドシップの恩恵か、4AG型のパワーかどちらにせよ、だ。辛いバトルになることは初めから予感してたけど、これは不味いかも…：

…でも、初めに想像していたよりも距離が離れない。ミッドシップ故の弱点、ピーキーさが、ツツコミにわずかに影響している、いや、アタシの想定より限界が高いはず、でもこれなら勝負できる。

お互いにタイヤが万全な間は勝負を仕掛けられない。なら限界までもつれ込ませる。そう難しいことじゃないだろ…！

「三本目入ります！ 5、4、3、2、1、GO！」

「三本目に入ったか。まだまだここから、ってわけだ。悔しいぜ。俺はここでもう

やられちゃってたつてのに。」

「こんばんは！先週は、話してませんでしたっけ。マチカネタンホイザです！」

「ああ、ネイチャさんのチームの。相沢だ。よろしく。君らのとこの御頭は、結構なスタミナなもんだな。俺にゃ簡単にはまねできないな。」

「ネイチャがああやって熱くなるようになったのはここ最近のコトですけどね。相沢さんとバトルしたときのネイチャは、いままでとは違うカンジがしてましたし。」

「じゃ、今回はそうだと思う？」

「今回も、というより、今回の方が、さらにいままでとは違う感じがしますね。今回も、私はネイチャが勝つと思ってます！」

「そうか。俺もそう思うよ。この前、すこし彼女と話したんだ。ビックリしたな、なんというか。バトルしていた時の殺気にすら近いプレッシャーを放つあのロードスターのドライバーと、自然体な感じで話す彼女はあまりに乖離していたからな。」

バトル前にも軽く話したけど、走り屋としてのオーラなんてこれっぽっちも感じやしなかった。はっきり言えば今でも同一人物か疑ってしまうほどさ。」

「そ、そんなにですか？私にはそんな風には見えないんですけどね。」

「ま、本気でバトルしたやつ同士でわかることってもんだな。一度本気を見たからこそ今回のバトルも彼女が勝つってわかるよ。あれを超える走り屋なんて想像つかないからな。」

「でしょう？ なんとたってうちのダウンヒルエースですからね！」

ギリギリと、追いつめられるような感触。三本目ももう終わる。そろそろタイヤのグリップに怪しさが見えてくる頃合いだ。程よい温度のドライ路面、タイヤが垂れるタイミングは大体予想できる。

あとがき

いや： イベントストーリー： めつつつつつちゃよかったです：。 なんとというか、キングとネイチャのなんというか自然体な表情で会話してる感じがもう：好きです。 今回はそれだけです。

用語コーナー

スーパージョージャー

過給機の一種で、ベルトで駆動する。レスポンスがよく、常に一定の過給圧をかけられる。

ここもこんだけです。

P5 狂乱、故に

遅れましてP5です。

「4本目いきます！5、4、3、2、1、GO！」

3本目までは均衡していたけれど、動き始めるのはおそらくここから。後追いのポジション。相手の動きがすこし違うように感じる。具体的に言うならアクセルオフが増えてきている。

このコースは道幅が狭く、危険と隣り合っているステージ。安全マージンをお互いひろくとらなければいけない。相手はそんな中でさえ極限まで削っていたマージンが、すこし戻ってきているようだ。

（つまりそれは、こっちのほうに限界を引き出しているということ…アタシの方が、相棒とのシンクロが高いということ！）

「…タイヤのタレが見えて来やがった…相手もペース自体は落ちている。それな

のに目の錯覚か、ほんのすこし距離が縮まっているように見える……」

このコースでイチバン速度の乗るこの場所で確かに最高速のわずかな落ちを感じた。パワー、トラクションの低い相手はここで俺より辛い、その前の区間でたしかにこちらより速かったことを俺は見逃しはしなかった。

……でも、結局はマシンとドライバーの総合力勝負。であれば拮抗した実力のあいつに俺とMR-2が劣る道理はない！6本目で仕留めて見せる！

「とうとう5本目ですか。お互い、スタミナが持たない頃合いですね。なにか声掛けの一つでも……と思うのですが、上ってくるたび、ネイチャさんの表情を見るたびそれすらもできないオーラを感じてしまいます……」

「けどそれって、きつとネイチャは集中できてるじゃないかな。前に走ってた時も似たようになってたし！」

「……そうですか。意外に、ターボさんは私たちの気付かないところを見ているんですね。」

「そっちの……えーとすまん、名前をお聞かせ願えるかな？」

「イクノディクタスです。相沢さんでしたよね。どうされましたか？」

「いや、ずっとカウントやってたらツライだろう？俺、変わるよ。」

「ああ、すみません。」

「気にすんな。それより、チームメイトの応援に専念してやってくれ。」

5本目。勝負はもう少し先だ。お互い最後の距離の測りあい。そこを過ぎれば余力はなくなる。言わば上昇するジェットコースターの頂上付近。身構えてかかる。

「カウント始めるぞ！5、4、3、2、1、GO！」

変わって相沢さんのカウントからバトルを開始する。入ってすぐの大きく回り込む左。動き、いや、それ以外のなにか、違いを感じる。それは微妙な本能的な側面からくるアクセル開度の違い。それにより生じる微かな速度差。

その違いは、3本目にあったマージンと比べて、ほんの小さな縮まりを伝える。ただし、立ち上がりの差故に相手もまだ仕掛けるに至らない。もっといえば相手の方も余裕はないはず。

こっちは回り込む右でのフロントの食いつきがすこし怪しかった。前後重量配分がいいことを含めてもあそこをベストラインで立ち上がれるのはあと2本が限界。さらに、中盤の10、11コーナーあたりのS字でベストラインを外し始めた。

こと「フロントタイヤのグリップ」に限れば、相手の方が残りがあるはず。リアにわずかな重量の偏りがある故タイヤのへたりに偏りがあるのは必然。

つまり、相手はリアタイヤのグリップの余力が低いはず。なら…勝機はある。

「6本目いくぞ！5、4、3、2、1、GO！」

最後の防御だ…ここで決着がつくならそっちの勝ち、つかないや俺の勝ち。どっちにせよここが決戦だ…確実に守り切る！

「お互い余力はもう残らない…だが、俺自身のスタミナをここで持たせられりゃ俺の勝ちは…!!」

——それが、トリガーだった。フロントの設置感が消える。リアのグリップを失いつつあった車体は、4輪の設置感をなくす。大きなスライドを起こし、隙が生まれる。

「——そこっ!!」

立て直しにかかる時間は短くとも、アクセルを抜かねばならない。それで十分。

「んなっ!？」

スペースがあるんなら…!

「ねじ込めええええ!!!」

ハナツラがMR・2のサイドに行く。左からの右。どちらか引かなきゃならないのに微塵も引く気がない。

「上等だぜ勝負だロードスター!」

MR・2は残ったグリップをこの場で消費しきらんと突っ込む。フロントが食いつくから回頭はするが、リアが垂れ気味で踏めばオーバーステア。

逆にフロントもリアも同じくらいのグリップのロードスターにはサイドバイサイドにまで持ち込むだけの余力が微かに存在する!

結果イン側で、かつ立ち上がりの速度を乗せていける!!さらに、メカニカルグリップ、つまりサスペンションによりコーナー限界が高いロードスターなら、アウト側でも踏ん張っていける…

ターボに言われた言葉を思い出す。握ったステアリングから伝わる情報。体が感じるロードスターという車に自分のもつすべてをゆだねる。

「頼むよロードスター…最後…全力で踏ん張れエ!!!!」

サイドバイサイドを維持したまま小さく左へ、そして右、丸形に放たれる光が前

を取る。

「…もはや張り合う余力ナシ…か。」

右コーナー。インを維持して曲がれるほどのグリップを残せなかったMR₁2は、こちらの目にはつきりと映るように、失速していった。

——意識が遠い。崖につかまっているみたいギリギリでとどめている。ああ…似たようなミス、この前もしたな…。路肩にとめてエンジンを止めるところまで洗練された日本刀のようだった意識は

その次には何十年もかけて削られた小石のようになっていた。こんな所で寝—それこそ警察沙汰のような気もするが、もはやそれ—らどうでもよくなるくらい疲れている。

ゆっく—と影に堕ち—いく意識を見—がら、その—ま眠りについ—

「お〜い。大丈夫かよ？」

コンコンと窓を指の関節でたたきながら声をかけてくる。拾い上げられた自我を手渡され、咄嗟に目を開ける。慌ててドアを開けて外に出る。

「あんた、バトルが終わったと思ったたら寝ちまうとはな。寝不足か？」

「あ、いやそういうわけじゃなくて、異常なまでに疲れていたっていうか。」

「なるほど、な。」

紅葉さんはポケットから煙草とライターを出すと火をつけて吸い始める。

状況がいまいちの見込めないので

「えと：バトル、アタシの勝ち、なんですすよね？」

なんて素っ頓狂なことを聞いてしまう。

「おい、そりゃイヤミか？ わざわざ負けたやつにそれを聞くってのはかなり趣味がわるいぜ。それともそんなにお疲れか？」

「あ、ははは〜これは失敬〜。」

「フン。満足か。：ま、認めるよ。俺の負けだ。俺はもう帰らせてもらおう。こんだけ長引いてちゃこっちも満身創痍だ。ウデ磨いて出直す。いつになるかはわからんがな。じゃあな。」

「あ：タンマ！」

「ん？もう趣味には付き合わんぞ。」

「そうじゃなくて、えっと。　　楽しかったです。最高に。」

「…ふ。俺もだ。上がないくらい充実してたよ。それじゃ。」

過ぎていくテールランプの残像を見送りながら、意味もなく深い息を吐く。上に行つて結果を伝えて、アタシも帰ろう。もう紅葉さんの言った通り満身創痍だ。今日はもう、眠りたい。

「やったあ二連勝！さっすがネイチャ！」

「ええ。見事です。」

「お疲れ〜！ほら、あったかいお茶！」

「ん、サンキュ…いや、冗談抜きで堪えたよ今回は…」

「ええ、そのようですね。今夜と明日はゆっくり休んでください。」

「うん、そうするわ…ほんと、アタシみたいなのに無茶させるよまったく…」

「けど、うれしそうだよ、ネイチャ？」

「そりゃ、うれしいけどね。もうへとへとで…あ、そうだ、ありがとうターボ。一昨日のアドバイスがなかったら負けてたわ。」

「？ターボ何か言ったっけ？」

「あはは、そんなだろうと思った。」

当人は覚えていなさそうだが感謝を述べておく。

くいっとお茶を流し込みもういちど息をつく

そうしていきなり、ぱりん、と割れるような音がして、また体に力が入らなくなる。

「ネイチャ！」

咄嗟に後ろに回ってタンホイザが受け止めてくれる。

「あちゃ、こりゃ重症だ……」

「無理しないで一回休憩しよっか。途中でぶついたりしたらまずいよ。」

「ん……そうするわ……」

その日は、30分ほど休憩して、家に帰った。アタシだけでもいいってんにみんな一緒についててくれるもんだから少し無理して早めに帰る。ベットに飛び込んだころには、意識はなかったかもしれない。

——日の光が微かに差し込む朝。電子音を耳に目覚める。もうすこし寝てやろうとアラームを止めると、電話が来ているのを見つめる。

『もしもし？わたしですーす！マナミさんですよー！：あれ、寝てた？』

「いや、おかげさまで少し目が覚めたよ。えっと、見た見た。ごめんね、返信できなくて。えと、何時ごろがいい？」

『お昼も一緒したいし11時頃がいいけどどう？』

「おーけー。迎えに行くわ」

『よっし！じゃ、まってるから！』

「ほいよーまた後でー」

ああ、忘れかけてたわ： ホント、ダメだわアタシ。

とりあえず、今日は昨日の疲れを癒せる重要な機会なのだし、ゆるっと付き合わせていただこう。

「ほい、お待たせー。ささ、乗りな乗りな。」

「さんつきゅー。場所はあらかじめリサーチ済みだよ、いったりましょー！」

11時をちょうど過ぎたあたりの時間、マナミさんのお店の前で合流する。街乗りもやっぱし楽しきかな、なんて思って運転する。最初はこのまえタンホイザと軽くお邪魔したところだ。そう広いわけでもない。

「ほく。改めてこうして見ると世界変わるねく。今まではガラクタの山みたいだと思ってたものが今や宝石箱だよ。」

「その感覚わかるわく。アタシもはじめアイツを…ロードスターを探すときはそんな感じだったな。あ、これとかどう？初期型の180SXのくタイプII！あ、けどHICAS付きか。だから安いのか。」

「はいきゃす…ってのは？」

「リアタイヤを左右に向ける技術だよ。ドリフトするってなると不向きだから嫌われてたりするんだけどね。それこそ高速とかよく乗るんなら便利らしいんだけどね。」

「ほく。勉強になるでく。じゃこれは？」

「S14、前期型のQ'sかあ。パワーも180よりあって、いいけど3ナンバーだから税金とか、あと予算的な都合からいくと厳しいかもね。」

「そっか。本体価格はともかく維持費は安いに越したことないしな。」

「そーするところはビミョいかな。どーする？」

「じゃく次いこっか！あ、その前におひるはさむ？」

「おうそうしよう。どっかいいところあるかなあ、途中。」

とりあえずのファミレス。ゆっくり食べながら話をする。

「だからア、そのお客さんが。」

「ゆうだけゆうだけ、アハハ。ところでマナミさんや、そろそろいかんくていいのかい？」

「おうそうだ。次さ、ネイチャちゃんロードスターを見つけたお店にしようよ。そこならきつといいやつあるよ！」

「あ。いいけど、ちょっと遠いんだよね。マナミさんさえよければ、当然そこがいいと思うけど。」

「モチ問題ないよ！」

高速度路代をケチりつつ約1時間、埼玉県坂戸市内。このロードスターを見つけたお店にやってくる。

「おう。数はすくないけど、この少数精鋭な品揃え…！」

そこではS15シルビア、R33GT-R、EK9シビックタイプR、SW11MR-2といった洗練されたラインナップだった。当然、というわけではないが

ロードスターも置いてある。

「ここは安くて、サービスもそこそこしてくれるから選ぶならここがいいね。」
「つかあ〜！こら眺めだけでも来た価値あるくらい〜！」

浮足立つマナミさんを見守るようにしつつ、自分も自分で一台の車を目にする。
AE111型カローラレビン。1.6の排気量、5バルブに可変バルタイ、4
スロ。NAの前輪駆動にこれでもかと魅力を詰め込んだ一台。一時期はこの車を目
にとめたことが何度もあった。

この車を選ばなかった理由はたった一つ。FRでなかったことだ。師匠がFR使用
である以上これは避けようがなかった。もしこの車のEgがAE86のようなFRに
乗っていればと、妄想する。

そんな考えの中、マナミさんは一台のちいさな赤い車を見つめていた。

「カプチーノ：？」

「うん。改めてみるとかっこかわいいのおと思いましてな？」

カプチーノとは。コーヒーの名前ではなくスズキの軽スポーツカーだ。軽自動車
ではなかなかないFRレイアウトに自主規制値ギリギリの64馬力のエンジン。マツ

ダ・AZ・1とホンダ・ビートと共にABCトリオとして親しまれた一台だ。

しかし、この車はその小ささから、車両制御がピーキーで、スピンもザラにあるような車なんで、あまりお勧めできない。ただ…

「室内はやっぱ狭いな。慣れなのかな、こりゃ。」
すっかりその気だこの人。

「ん〜と、マナミさん？その〜なんだ、話の腰を折るといふか勢いを止めるように悪いんだけど〜」

「ほい？」

「その車、けっこう暴れ牛といふか、難しい車でして、そんできま〜おすすめは〜といふか。」

「…なるほど」

さすがにマズかったかな。でも、これもマナミさんのため…！

「じゃ、裏を返せば扱いこなせてしまえば楽しくて速い、ってことだよね？」

「…え？」

「ネイチヤちゃんは忠告のつもりだったかもしれないけど、ちよっぴりそれは遅

かったかな。私、ホレた男は是が非でも捕まえに行くタイプでね？」

「しまったあゝゝ！逆効果だったかあゝゝ」

「：けど、冗談抜きでその車は扱い難いとおもうよ？」

「もちろん、その忠告の意図をわかってないわけじゃないよ。けどさ、前もネイチャちゃんと言っていたようなことだよ。聞こえるんだ：声がさ。まるで私を呼ぶような、幻でも何でもない、確かな何かが。」

「：あ。」

車の声を聴くこと。そういうことが時に大切だと言ったことは確かにある。ただこのシチュエーションの場合、悪魔の囁きというかなんというか。

「たしかにネイチャちゃんの言うことはもっともだし、軽自動車ってこともあって本質的に速い車でもないとおもう。」

振り返って、マナミさんは今まで見たことのないほどのまっすぐな視線で。

「それでも：私はこいつがいい。そう思えるものを、こいつは持っているから。」
ただただ純粹な思いを口にしてくれた。

「：わかった。もう止めたりしない。だけど、私と同じように走ろうってんなら、これを覚えておいてほしい。」

どこまで行っても、私たちはあぶれ者。私たちの世界は、どこまでも認められない世界。正当化できないってこと。全部自己責任。それだけは心に留めておいて：その上で、どうする？」

「——もちろん、ついていくよ。貴女に、こいつと共に。」
こうして、新しい走り屋仲間が、加わることとなったのだ。

あとがき

お久しぶりです。関西の方にここ数週間飛んだりしていたために遅くなりました。プロットとか構想自体はそこそこ考えているのですが、どうしても書き出しのために時間を使うことに謎の抵抗を感じてしまうため、アサシンクリードとか起動してしまふんです。まああーだこーだ述べても仕方ないので今後の予定で

すが、今回はネイチャとイクノの誕生日とマナミさんの納車話を書こうかと思いません。カプチーノについてはそこまで知見があるわけではないので少々

描写が微妙になるかもしれませんが、可能な限り努力するので多めに見ていただければ。ただ、ハイパーレブのカプチーノ号はV.O.I.153となるのですが、たっかいんですよね。購入の敷居が〜とか、オーバーレブ！も買いたいから〜とか、いろいろ言い訳が：まあ、こちらの方でいろいろあると思うので、今回はこの辺りで。これからどうぞよろしく。

用語コーナー

S15シルビア

7代目のシルビアです。5ナンバーへの回帰、性能の大幅向上、見た目の大幅リフレッシュ等で有終の美を飾りました。

R33GT-R

スカイラインGT-Rの4代目に当たる車両です。大型化や見た目などから不人気なようにうかがえる一台ですが、高速域での性能や安定性から現在は最高傑作に上げる声もあります。また、「広報チューン事件」なども有名です

EK9シビックタイプR

6代目のシビックに設定されたグレードで、大幅な軽量化、パワーアップ、チューニングで人気でした。

SW11MR²

MR²の二代目モデルです。車体の拡大こそしたものの、時間がたつごとにマイナーチェンジで性能を向上させていきました。

可変バルタイ

可変バルブ機構、といい、その機構はカムシャフトによるリフト量を変化させ高回転に対応させるもの、バルブの開け閉めでパワーを変化させるものなど様々です。

マツダ・AZ¹

マツダの軽ミッドシップスポーツカーです。ガルウィングドアを採用していることや高い性能を有していることから世界最小のスーパーカーと言われます。

ホンダ・ビート

ホンダの軽ミッドシップオープンカーです。モノコック構造の採用、四隅に配置されたタイヤなどが特徴です。現代においても非常に愛されている車であり、15

000台以上が現存していると言われていす。

P6 過ぎる時間とやってくる時間

モチベーションがガタ落ちしているのでおそらく次回も遅いです。

4月も半ば。16日を迎えた朝。今日は日曜日。気乗りはしないが、この誕生日というイベントを人生の中で避けて通る訳にもいかない。

明日以降のこともあり実家に帰ることこそ叶わなかったが、イマドキ便利なもので、電話をそこら中に持ち歩いて使えるのである。(まあ住んでる地域的に若干接続が怪しいことがあるケド)

いろいろを終えると少し支度をして食事をする。一人の食事には慣れていた。過去形なのは、現在ではそういった家族のこともありにぎやかな食事にも慣れていくからだ。

寂しさを感じても、今の自分にそれをどうにかするほどの術もないわけで、サクッと朝食を済ませる。

誕生日だからと言ってやることはいつもの休日だ。買い物洗濯掃除ETC…そういうった家事をこなして時間を有意義に過ごしていると、メールを一件受け取る。内容は今晚のことについてタンホイザからだ。昨日に続きこれに関してのメールは三日連続だ。(そんなに忘れっぽいと思われているんだろうか)

ピピッと返事を送って、掃除もひと段落。であれば、残った時間は最近できていなかったことをしよう。

車を走らせ、最寄りの洗車場に到着する。お金を入れて水を出す。雨漏り対策は施工済みなので気兼ねなく洗車できる。

「そ〜れ、シャワーだぞ〜。」

ジャ〜っと水をかけてバケツに貯めた水にスポンジをつける。スポンジを泡立たせると全体の汚れを落として回る。それを水で落としてあとは乾拭き。吸水のいいタオルで拭いたら完璧だ。

「たまにやると気持ちがいいな〜。最近忙しかっただけじゃなく、いろいろあったしな〜。すこし自分で点検でもしてみたり。」

意気込んでフードを開けるも、特に触るところはなく、ちょこつと肩を下す。

「そういえば、走行距離…」

見ると、すでに10万キロの大台も見えてくる頃合いだった。職場までの往復、それと雑多な使い方に峠…これくらいは行くだろうな、というラインある。

「オーバーホールでもお願いしようかな。今お金どれくらい余裕あるんだろ。ええと、毎月貯金する額とかも差し引かなきゃだから…帰ってからかな。」

そういえば、B6エンジンには走行距離が延びるとピストンがみるみる削れて圧縮比が上がる不具合があるとか…こりゃ早めに町田さんに相談カナ。

「…あ、シビック。」

セダン車なので、シビックフェリオと言っただろうか。私たち1・6FR乗りに目の敵にされている（すくなくとも師匠はしていた）シビック。その速さの特徴と言えば、VTECがあげられるだろう。高回転高出力の1・6リッターFF。

これがライバル視されない要因はないだろう。

「…っていけね。買い物もしなきゃなんだし、ここにずっといるわけにもいかないや」

その夜。ドアベルを押すとすぐさま返事が返される。すでに見慣れた車が近くに数台止めてあったので、イクノ達は来ているだろう

「お待たせ〜！ ささ、入って入って〜。」

「ありがと〜。お邪魔しますと、いい匂い〜！」

中に入ると、ごはんがすでに並べられていた。ターボとマナミさん、タンホイザの三人で仕上げてくれたようだ。

「どうぞごさいますようネイチャ師範？」

「師範て…しかし、なんだか悪いね。誕生日だからってにここまでしてもらうのは」

「誕生日だからこそ！ ネイチャとイクノはいつもターボたちのために頑張ってくれてるから、これくらい当然だよ！」

と、いつつ手には数か所絆創膏が見えているあたり、ターボも相当がんばってくれているのだろう

「ささ、こちらに〜。」

ぐいぐいと押されて椅子に座ると、タスキをかけられ、そのタスキには「本日の

ダブルエース」と書かれている。

「こ…これ、作ったんだ。」

「そ。私、こー見えてもお母さん仕込みの手芸技術だからね。もっとしゅげーモノだって作れるよ？」

「これ、せっかくのご飯が冷めたらどうするんだい。」

「むく乗り悪いな。よっこいせ。これで全部かな。」

「え〜では！至らずながら本日司会を私マチカネタンホイザ務めさせていただきます！ナイスネイチャ、イクノディクタス両名の誕生日を祝って〜。」

「[[[[乾杯！]]]]」

カンツと気持ちのいい音が鳴り、グラスに注がれたジュースをグイっと一口。歩きでは来ていないのでみんなノンアルだ。

広げられた食べ物はやけにクリスマス臭のするラインナップ。クリスマスカラーのメンコなんて覚えていないくらい昔につけていたものなので、今はユーノスの口ゴっばいやつだったり。

「というか、マナミさん、この前三人とはあったばかりだったんじゃないか…？」

「そーだっけ？私としちゃもうむかしっからの友達ってかんじだけど？」

「そうだ！ターボのスターレットにもこの前乗せてあげたんだよ！」

「そ〜そ〜もうすっごい加速感で、もうヒイヒイでしたわ私やも〜。」

「ターボはすっごい曲がり方するからね〜。私にもまねできないや〜。」

「ほ〜。そんな風になってたんだ〜。（というかタンホイザとマナミさん、話し方が似てるから、どっちがどっちか声がないとわかりづらいだろ〜な。）」

「ネイチャさんこそ、最近はどうされていたのですか？ここ最近土坂にこられていないことが多いようですが…。」

「あ〜。最近、定峰のほうによく行っててさ。自主トレ…とは違うんだけど。慣れない環境でのバトルつてのを覚えておくべきかなって。」

「けどネイチャの場合、埼玉県内はどこも走れるような感じじゃない？」

「そう、そこがミソなんだよね。今までバトルしてきた相沢さんや紅葉さんは、みんなこのコースの熟練度がこっちのほうが上がだから勝てたようなものだと思うてるんだ、アタシ。」

「だから、自分の真の実力は知らないコースでこそわかる、と。そう考えられたん

ですね。」

「ん。でも、タンホイザがさつき言ってくれたように、埼玉のコースはそこそこ慣れてるところがおおいからさ、ちょいと困ってるわけ。」

「なら、県外のコースならいいんじゃないかな？ 群馬とか、栃木とか！」

「そ、県外も行きたいけど、いかんせんそこまでヒマでもないからなく、と。」

「じゃ、今年の抱負はズバリ県外ってコトだ！」

「や、そこまでいってないから。」

しかし、そんなことをするとなるといよいよ戦力不足な気がしてくるな……。ロードスター自体、もとよりそんなに戦闘力の高いマシンでもなく、楽しく走るための車。あっちにいけば四駆がいても文句は言えないし、うゝむ。

深夜の定義に抵触するくらいの時間、そろそろお暇しようかとしている時だった。

「おやおやネイチャさんにイクノさん？ なにかお忘れでないかい？」

「へ？ プレゼントならもらったけど？」

「違うよ！ ケーキ！ まだ食べてないでしょ！」

「あ…： そういえばそうだ。」

「すみません、うっかりしていました。」

「ほれ、でっかいホールケーキだぞう！食べていきなされや！」

「あ、ちょい引っ張んない！」

連れられると、通常のケーキにちょいと人参の足された仕様のよう。数字の書かれたろうそくに火を灯すと電気を消してやいのやいのと歌いだした。

——絶妙ななつかしさを感じる。ゆらりと動く灯火を眺め、走馬灯を見るみたいにこれまでをふと回想していく。ごく最近のものから、遠い昔のことまで。全部ぜんぶ——

「はい！消して！」

力いっぱい息を吸って、吐く。ふっと明かりが消え、また、自分が一步前へ進まされたことを、この時をもって実感した

「電気、つけるよ。」

明かりがともされると、少し目を細める。人の目はよくできているもので、明かりを取り込む量を勝手に調節できるらしい。

「もう…こんな長いこと生きてんだ…アタシ」

誕生日は、漏れ出すようなそんな感想で終わりを告げた。

そしてさらに数週間。

マナミさんに電話で呼ばれ、マナミさんの家の近くへ車を向かわせる。到着すると、現地にはこっちよりもさらにずっと小さく、そして発色のいい赤色。

「いやあ、いいねえ。手の込んだ軽自動車ってのは」

「驚かないんだ？」

「そりゃあ、これで来るってのは予想できてたからね。で、いくらだった？」

「フッフッフッフッフ…なんと！」

ピットと5本指をぐっと開けてこちらに出してくる。思わず同じ手の形で返してしまう。

…正直安いのか高いのかよくわからん。

「いやね？こゝんなにビビったときたもんがこんなに簡単に手に入っているのかと！しかもタイヤとオイル等整備のオマケ付き！どうよ！」

「…あっ！アタシンときよりタイヤの銘柄良くなってる！にゃろ〜！」

「え、そうなの？」

「そう、アタシの時フツのコンフォートタイヤだったんだけど、かゝ！」

「タイミングが悪かったねえお嬢さん？」

「んあ、そうだ、これ、フルノーマルだった？」

「あ、えっとねー。ボンネットのロックは…これか。」

ガチョン、とかるく音をたてロックが解除される。エンジンルームを覗くと、何がついているわけ度もなさそうな一見ノーマルのよう。

「ほらここ、バッテリー。」

「あら。ドライバッテリーだ。」

「そう、そのどら焼きとかいうのになってるんだってね。」

「どら焼きで…」

しかし、なぜそこだけピンポイントに交換されているんだろう。マフラーにも変化はなかったし。

「聞いたところによると、一回バッテリーあげちゃって、そんなきについでに交換したらいいんだよね。お店のヒト、前にもこの車のコト見てたんだとさ。」

「あゝ。がってんだ。で、どうよ、カンジは。」

「そりゃもゝ最高！ イイ音するしきびきび走るし、家の軽バンとは大違いだよ！
なんだか、手の内で転がせるカンジがするとうか？」

「あゝ。軽バン、普段モノ積んでないでしょ？」

「うん、それが？」

「軽トラと違ってさ、「積み荷があることが前提」だから、それが無いっていうのは
メーカーが考えてるより速くなってる状態なんだよ。クルマって、メーカーが販売
してる以上、それなりのマージンが設けられてるんだよ」

「うん。じゃあ、積み荷のない軽トラとかは、「販売された時点でそのマージンを
削った状態にある」ってこと？」

「そうなる。アタシも一度、軽トラを運転したことあるんだ。サンバーって言って
ね。乗る前は軽トラだからって、軽い目で見てたけど運転してみるとこれが意外と
楽しいの。それはたぶん、軽量化されて、「余剰感」が生まれたから」

「余剰感：つまり、必要以上の感覚がするってこと？」

「そう。つまりそれは、チューニングカーと性質が近いってことだと思うんだよ。」

「ははあく……。チューニングカーは、クルマとしての余剰が生まれて、それが空の軽トラと似てる、と。」

「そういうこと。で、カプチーノの楽しさはひとえに「人車一体」であるから。操り切る楽しさが人車一体、操り切れない楽しさが余剰感。ほら、かなりタチが違うでしょ？」

「なるほど……。いやはや、ご教授ありがとうございます。」

「そんな改まらないでよ、アタシがこーいいうの好きなだけだし。」（正確に言えばこーいったものが好きなのは作者。）

「いや、ありがたいのはホントだよ。ネイチャちゃん。今夜、時間ある？」

「うん。明日も休みだし、万事おっけーだよ。」

「なら、今夜から早速レッスンしてよ！アタシ、ネイチャちゃんの家までピックアップしに行くからさ。」

「おっけー。なら今晚。」

「やったあ！じゃ、約束！待っててねー！」

そういうとぱくつと走り去ってしまった。こう見ると、運転上手いなあの人。

その夜、定峰峠——

時刻は夜9時過ぎ。天気は晴れ。絶好のドライコンディション。

「そうそう、初めはしっかり止まる、どんな方法でもいいから曲がり切る、そうやってだんだんスピードに慣らすところから。」

「むう… ブレーキ、クラッチ踏んでアクセル入れてって…」

「うん！いいよその調子！」

初めは登りでスピードレンジを比較的低めの状態で練習。下りは間違いなくスピードが乗りすぎるので、安全を最低限考慮してのことだ。

「いっやあ、一筋縄じゃ行かないなあ。」

「そりゃトーゼン。ドラテクってのは1日2日教えてもらったくらいでどうこうなるものじゃないのさ。それこそ暇さえあれば毎日、夢の中で峠を攻めるくらいの気じゃないと。」

「夢の中ねえ… そもそも、この車がどういう風に速く走るかのビジョンが浮かんでこないんだよな。ネイチャちゃん、試しに乗ってみてよ！」

「へ？いや… そもそも初乗りだから、そんなに上手いことはできないよ？」

「いゝからいゝから！」

：乗せられてしまったが、はてシートポジションもシフトノブもペダル配置もまるで違う車をそんなにすぐには無理でっせ…

「：ぶつけないようには頑張る。」

「おっけー、どうぞ！」

エンジンを始動させて、クラッチを離す。一速に入れてクラッチをつなぎ、

「あ：意外と。」

回転数は8千ちょいまで回せるようだ。(アタシのロードスターよかせんぜん回るゝ！) 回転数を上げて加速を：と、ここにきて

(や：やっぱ遅い…) 64馬力ぽっちなかないので当然だが逆にこんなものなら扱いやすそうだ。初めの左旋回、そこで抜群の旋回性能に気付く。

「これなら、案外行けそう。本気で行ってみていい？」

「モチ！」

バンと踏み込み、二速、三速とギアを上げていく。右のヘアピンで思い切ってドリフト。アクセルを開け閉めしてのコントロール性はターボ故ロードスターほどで

ないにしても、十分なレスポンス。

「おお… おおお!？」

スピードレンジが低いので、下りでもそこまで気張らなくて済む。このくだりの一本は遊び倒してやろう。

「いや／＼なかなかたのしかった…」

「つ… 疲れた」

「どう？ なんかしら掴めた？」

「あ、そうだ。あの、ブレーキ踏みながらギアチェンジするやつ！ あれどうやってやるの？」

「それね。おっけ。じゃ、まず乗って。」

車に乗せるとちよいちよいと説明を始める。

「あれはヒール&トゥっていつて、ブレーキとアクセルを右足で同時に操作するんだ。左足をクラッチに乗せて右足はブレーキ、回転が下がってきたらつま先でブレーキを抑えつつ踵でアクセルを回す。やってみ」

「ん／＼と、こういうことか。」

「そうそう。それは割と難しいから、今から覚える必要は…」

「ん？どうかした？」

「いや、一台…シビックか。」

青色のシビックフェリオ。なんだか既視感のある一台が上っていった。

「ま、とにかくヒール&トゥより先に、自分の体を慣らしちゃうところだよ。さ、そうと決まったらもう一本！」

「おっけー。ささ、いこー！」

夜は長い。じっくりと練習していこう。それで、そのうちチームに正式に入れてやれる時が来れば…淡い期待を胸に一夜を終えた。

皆さん。今年も半分が過ぎましたね。毎度投稿頻度の低い作者です。言い訳もとくにないのですが、最近は首都高スペシャルを読んでおりました、現在首都高を舞台にした作品を考えています。しいて言うならそれがいいわけですね。ただし、そ

こちらの方は党アカウントでは公開せず、別のアカウントで投稿する予定です。というのも、このシリーズの完成度に若干不満を持ち始めているので、そちらのアカウントでリメイクするつもりです・まあ、本作完結まではゆっくりとお待ちください。

すこし小話

(本編外のことですので、特段の理由がなければ読まずに)

どうも。作者です。この長い期間更新をしていないのに、深い理由があるかと言われれば、ありません。

強いてあげるとしてもふたつですね。

1つ、まずウマ娘のモチベがかなり尽きてしまったことです。自分、燃え尽きやすい質でして、昔もそういうことが多々あったんです。ですが、ウマ娘を好きでなくなったかというところと全くそんなことはなく、現在でもしっかりコンテンツは追っております。

もうひとつ、文章制作の方のモチベーションがなくなってしまうことです。といってもこれは1つ目の延長線に過ぎず、一がなくなると連動して2もなくなっ

たという形です。

現在では両方ともかなりチャージされてきていまして、ウマ娘は、10年以上の付き合いの友人と夜通しウマ娘のクイズ等をやっていたためかなり回復しています。後者も、空の境界を上・中・下を読み終えてかなり蘇生しています。

現在7話を書き出しています。8話完結となります。そんな不安定な作者故、今後とも何卒。

では、それ以外の小話もいたしましょう。

とは言えど先述の内容の深掘りのような話ではございますが。ウマ娘、というコンテンツ全体で見ると、現在でも生きる糧となっていてとても助かっているのですが、これが「アプリケーション」のウマ娘となると、とたんにここに義務感が生まれてしまうんです

完全なる私情ではあるのですが、ウマ娘はそういった事情があり本腰をいれてプレイできないことが長らく続いておりました。最初にウマ娘を始めた要因に、「プリンセスコネクト! Re:Dive」というゲームがありました。(以後プリコネと)これはサイゲームス様で運営されているゲームで、ウマ娘とは先輩でもあり後輩

でもある、という複雑な関係性のコンテンツです。これをウマ娘サービス開始以前に軽く触っていた私は、「サイゲからウマ娘なるゲームが出るらしいぞ」と、噂を聞きつけました。

それ以前のアニメなどには全く触れておらず、それを期にアニメを見ました。ウマ娘がサービスを開始してすでに少し経っており、すでにアニメ二期のサブスク配信が始まっていた頃なのですが、これに見事にドハマリしました。

はじめは、登場人物にママと言われるキャラが10人ちかくいたりとか、ストーリーカーがいたりだとか、「ちえるーん★」であったりとか、プリコネはそんなコンテンツだったの、はてさてどんなドヘン：紳士的なアニメかと思えばこれがもう熱く萌えるに熱く燃える最高のアニメではないかと。

そして造り込みの面でもハゲるほどで、感服しました。故すぐにもゲームを始めたのですが、このゲーム性は自分の趣味趣向と絶妙に合わなかったの、自分はその以前はNEED FOR SPEEDや、FORZA HORIZONなどを主にプレイしており、

まあそのノリでプレイしていけるわけもなく、結構すぐ一度やめてしまおうんで

す。それから半年ほどした頃までの間もコンテンツ自体はチェックしていたのですが、その時代は変態紳士LEVEL100みたいな時代だったので、あまりメインにプレイできていませんでした。

でもってそうして半年ほどした頃にネイチャさんにガチってしまいました、で、そのころにこのシリーズの構想を思いつきました。で、そこからかなり間も空いてしまったわけです。この経歴だけでもかなり飽き性なのが見て取れると思うのですが、

まあそんな性なもので、イマイチ本腰を入れてなかったわけです。

これからもほそぼそと書いていくでしょうが、またこんなことがあるかと思いません。そんな人間故どうかご慣用に

ウマ娘 ストリートダービー

著者 ろどっぱち

発行日 2022 年 10 月 24 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/287920/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
